

文学の格好の題材。靈魂の不死に至つては、プラトン主義やピタゴラス派の主題である。

ユダヤ教はこれら四つの事柄が、経験的に知り得ない領域の知識であつて、生半可な知識は軽率に神の權威を疑い、トーラーの根柢を揺るがしかねないとして忌避したのである。ユダヤ教が定める人間の歩むべき義なる道ハラハーとは、経験世界における日々の営みにおいて、何が正しく何が邪な行いであり、何が許され何が禁じられ、何が清く何が穢れているかを識別し実践する学であり、これこそがこの世において神の栄光の宣揚を意味した。

ギリシアの学問は中世においてイスラーム哲学を通してアラビア語に翻訳されて圧倒的魅力をもつて立ち現れた。しかし、アラビア語で為されたユダヤ哲学は一二世紀のマイモニデスを頂点に衰退する。彼は、ユダヤ法についてはヘブライ語で著作しており、ユダヤ教的思惟は、ヘブライ語によってこそ浸透することを自覺していたかのごとくである。

聖人の誕生

——コプト・キリスト教を事例として——

岩崎 真紀

カルケドン公会議において異端宣告されローマ教会と袂を分かつて以来、エジプトで独自の発展を遂げたキリスト教、コプ

ト・キリスト教（コプト正教会）の信仰世界を理解しようとするとき、その特徴的な要素のひとつに聖人崇敬がある。コプト・キリスト教における聖人とは、信仰者の理想であるとともに、神と人間のあいだのとりなし（シャファア）を行う存在である。コプトの公的な教義においては、ある人物が聖人と認定されるためには、死後五〇年という期間と、厳格な列聖制度に則った審査が必要とされる。しかし、現実には特殊な宗教的能力を持った人物は、存命中でも、死後五〇年未満でも、聖人とみなされ、人々の崇敬を集める。

本発表では、エジプト中部の都市ミニヤ市近郊の村で現在司祭を務めているアブナー・インジリウスという修道士の半生と信仰実践、そして、彼に対する人々の崇敬を見ていくことで、コプト・キリスト教における聖人崇敬がいかにして成り立っているかを考察した。

アブナー・インジリウスは、一九三二年一月二五日、ミニヤの南約二〇〇キロに位置するソハージュ県ジュハイナ市で、裕福な大工の両親のもとに誕生した。家族の知人に修道士があり、彼は修道生活に興味を抱くようになる。一六歳を迎えると同時に故郷を出て、修道士となるべく紅海に面した東方砂漠にある世界最古の修道院聖アントニウス修道院に入った。同院で修道生活を送る一方、前総主教キュリロス六世の指名により、六八年から七五年にはエルサレムのコプト教会の司祭を務めた。帰国後ベニ・スエフ県（ミニヤ県の北隣）の修道院に入るが、七六年、「聖ジョージの導きによって」現在司祭を務めるサフト・シャルキーヤ村の聖ジョージ教会の司祭となり、

第5部会

それ以来教会敷地内の一室に住み、典礼を司る一方、崇敬者として彼のもとを訪れる人々にバラカ（祝福）を与えている。

アブナー・インジールウスは、あるときから悪魔祓いができる司祭として有名になり、のちには彼のとりなし（シャファア）によって信徒たちの病氣治癒を中心にさまざまな奇跡が起こるとして、さらに多くの人々が彼のもとを訪れるようになった。現在は、通常のコプト教会同様金曜と日曜に行なわれる典礼を、彼とほぼ同じ時期に着任したもう一人の司祭アブナー・スレイマーンとともに司っているが、アブナー・スレイマーンは崇敬の対象とはなっていない。アブナー・インジールウスは、自分のもとを訪れる崇敬者たちには典礼以外の時間に應對する一方で、月のはじめには、修道生活に集中するため日曜午後から火曜までは隣県の修道院で生活する。妻帯者も多いコプト司祭のなかで、司祭を兼任しながらも頻繁に修道院を訪れ、清貧を守りながら共同体のためにも祈りをささげる彼の姿は、信徒にとって特別な存在として映る。

生者には正式な列聖がないなかで、アブナー・インジールウスを聖人たらしめているのは、人々の崇敬実践である。彼らがアブナー・インジールウスを聖人とみなす理由は、①修道士としての生活、②奇跡譚の二点に大別できる。彼は修道院という神への純粋な信仰を実践する場に属しながら、村の教会という世俗に開かれた場所にも属し、「聖」と「俗」の橋渡しをしている。世間の喧噪を離れ、神への献身と祈りに身を捧げ、人々に奇跡を起こし続ける修道士としてのアブナー・インジールウスの姿は、俗人には容易に到達できない理想的キリスト

教徒の在り方を示し、聖人としての崇敬を受けているのである。

クザーヌスにおける「神の名」の問題

島田 勝巳

本発表では、ニコラウス・クザーヌスによる神の名をめぐる思索を、偽ディオニシオスの肯定／否定神学の枠組みに則って議論が展開されている *De docta ignorantia*（一四四〇）を中心に検討する。特にここでは、神の名をめぐるクザーヌスの議論に形而上学的基盤を与える「包含」と「展開」の理論、さらに「縮限」の理論の性格に注目しながら、それとディオニシオスの神名の階梯論との違いを明らかにしたい。

クザーヌスにとって、理性によって与えられる名称は、不可避的に区別 (*discretio*)、あるいは対立 (*oppositio*) をもたらさざるを得ないものである。したがってそれは、一切の対立から自由な神には本来的に適合し得ないものとされる。だが一方で彼は、「二性」(*unitas*) については、そうした対立関係にもたらされない、神に適合するものとしても語っている。しかし、こうしたクザーヌスの両義的な視点はいくつ矛盾するものではない。その背後には、彼が神と被造物の形而上学的連関を規定する際に用いた「包含」(*complicatio*) と「展開」(*explicatio*) という理論的基盤がある。